

# ことばでめぐる レーモンド建築



2024年は、アントニン・レーモンドの設計により現キャンパスに南山大学の校舎が建設されて60年の記念すべき年です。

1964年に竣工し、「高価な仕上材の美しさや特異な構造体の奇抜さに頼ることなく、与えられた自然との調和と機能的な校舎群との結びつきのなかから、これまでに見られなかった大学校舎群の新しい空間的秩序を創造したことは高く評価されなければならない」という講評とともに、翌年には日本建築学会賞(作品賞)を受賞しました。それまでの歴史的意匠が施された建物とは異なり、工業生産による材料(鉄・コンクリート、ガラス)を用い、その特性をいかした機能的で合理的な設計理念に基づいて建てられた日本におけるモダニズム建築の重要な作品とされています。

そして2024年、モダニズム建築群の保存再生と大学キャンパスの成長デザインへの取り組みにより再び日本建築学会賞(業績)を受賞しました。今回の業績賞は、2015年のQ棟・リアンの新築から始まり、レーモンド・リノベーション・プロジェクト、2022～2023年の図書館改修工事を経て、長期間にわたりレーモンド建築の再生保存を取り入れながらキャンパスを継続的に成長させている取り組みが評価されたものです。

YaMazat60



この小冊子は、アントニン・レーモンドに関する著作物や  
キャンパス内の解説サインから文章を抜粋して  
レーモンド建築を紹介するものです。

写真はできるだけ竣工当時のものを掲載しています。

想像してみてください、レーモンドがみた60年前の情景を。  
想像してみてください、レーモンドが思い描いた60年後の大学を。

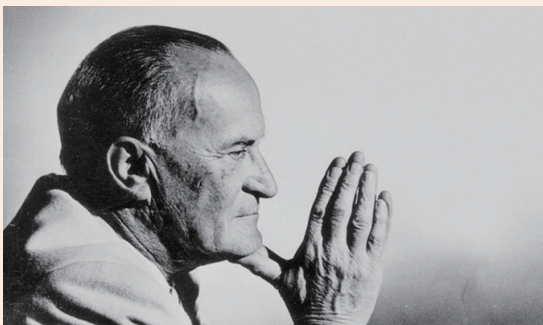
そしてこの小冊子を片手にレーモンドの思いが  
今もこのキャンパスに息づいているかを確認していただければ幸いです。

巻末には、南山大学ライネルス中央図書館に所蔵する  
レーモンドに関する資料の一覧を添えました。  
この機会にぜひご一読ください。

\*学外の方も利用登録のうえ、館内での閲覧・貸出等が可能です。



## 建築家 アントニン・レーモンド Antonin Ramond(1888-1976)



ボヘミア地方クラドノ(現在のチェコ共和国)生まれ。1919年、近代建築巨匠の一人、フランク・ロイド・ライトの助手として帝国ホテル建設のために来日。その後1973年に85歳で日本を去るまで、第二次世界大戦前までの18年間と戦後の26年間のあわせて44年間に日本に滞在し、自然と風土に根ざした実用的で美しい建物を作り出した建築家として知られている。

アントニン・レーモンド〈G棟1階解説サイン〉

あなたは、建築設計においても、また工事に着手してからも、「うそ」とか「見せかけ」とかを大変嫌われました。純粹であること、つまり純粹な姿、純粹な素材、ありのままの形をこよなく大事にされました。純粹さを脅かすようなことは大嫌いな方でした。心もやはりその通りの方であつたに違いありません。そういう意味では、南山学園のモットーである“Hominis Dignitati”(「人間の尊厳のために」)をよく守って下さいました。

Mr. Raymond:あなたは、数々の立派な仕事をこの世に残して、私たち日本のために、また広く人類のために尽されました。神のお報いが[あなたの上に]豊かでありますよう心からお祈りいたします。

アルベルト・ボルト「1976年11月10日故レーモンド追悼ミサ弔辞(手稿)」  
〈『アルベルト・ボルトと南山学園(南山学園史料集, 5)』p.116(2010)〉

## 南山大学総合計画



1. 第1・2期総合計画完成頃のキャンパス

1961年8月、はじめて敷地を訪れた時でさえも、私はきわめて魅力的なその風景と草木を、できる限りそのままにしておかなければならないと考えていた。もしその風景、草木をとり払うことを許したら、再びもとのようにするまでには何年もかかることであろう。そしてほとんど過ちをおかさない自然の巧妙なやり方に、決して適合することはないであろう。土地の性格そのものが、水平と垂直の両方向の弾力的な解決に向かえることを示唆していたが、これは日本のデザイン哲学のなかに端的にあらわれる。そして、平凡な、どこにもある、退屈で、無意味な、広場の偽記念性とか、列柱、広い階段、その他の高価な装飾など、世界中ほぼすべての大学にあるものはやめたのである。

もし私が真の日本の伝統を、記念碑的でなく人間的尺度として維持しうるならば、また真に機能的なデザインを保てるならば、もしもあらゆる意味で単純で、直截で、経済的に保てるならば、そしてまた装飾といえば構造自体であるといえるデザインをした時こそ、私は何か本当に価値のあるものを創り出したのである。中心軸に対称であることに頼るような重苦しい静的デザインの代わりに、その土地そのものが非対称性を示し、高低変化を示していたから、土地に適応して草木が大地に育つが如くに、根を張らせてその土地にとりつけたのである。非対称性と弾力性は、陶器、絵画、庭園、建築、すべての民芸のようにあらゆる日本の古代芸術の性格の一つである。私はその敷地計画において、ことさらに伝統に忠実であったつもりである。ともあれ、統一した尺度と統合的な処理によって、背骨、すなわち尾根の両側にある全部の建物が、あたかも一つの建物であるかのような、ある程度壮大な印象を造り上げたと信じている。

個々の建物の計画は完全に自由で、内的機能が何ら偽の形式に妨げられないようにしたことが、全建物に明瞭にあらわれている。その結果、教室群、図書館、食堂棟、前例に頼らず、現代的機能と要求とを強調し、新しい形をつくり解決したのである。

＜『自伝アントニン・レーモンド』p.258-259(1970)＞

## 南山大学キャンパス案内

### 1 正門



2. 正門(1964年5月31日)

正門は南端にあるが、それは丁度城門に入る時の様に敷地内の建築をほとんど見えない迄に小立[ママ]の間に設けてある。門を入りスロープを上ると、研究室棟のピロティをつき抜けて台地の尾根伝いに南北に走る通路あり[ママ]、この計画の主軸になっている事がわかる。

内藤昌「南山大学の建築」  
〈『近代建築』18(9), p.82, 1964.9〉

### 2 メインストリート

新しい南山大学の設計をするため、シュライバー神父、私の妻、そして私の三人がその敷地を見に行ったのは1961年(昭和36年)の7月か8月のある大変暑い日でした。私達は敷地にある岡や、谷や、狭い道や、低いがよく繁った雑木林など、敷地内を隈なく歩き回りましたが、そのうち特に私の注意を惹いたのは、尾根に続いている細い道でした。その尾根は敷地の背骨のような形をしていました。そこは四方から微風を受け、東西両方面に素晴らしい眺望を持っていましたので、私はその時その場で直ぐその尾根を敷地計画の基本とする事に決めました。私は建物によって区切られた空間を通じて眺めることが出来るこの道路に跨って立つ数々の建物や、部分的にそれらの建物の中を一直線に突き抜けて北と南に眺望の開けた所へ通じるこの道路を目に浮かべる事が出来ました。

アントニン・レーモンド「自然を基本として」〈『新建築』39(9), p.116, 1964.9〉

第一に明らかになったことは、レーモンドが「自然を基本として」大学キャンパスを構想した敷地は、当然のことながら手つかずの自然ではなく、近世以降現代までの歴史の中で一連の変容をこうむってきた土地であり、それ自体が自然の諸条件と人間の社会的文化的活動とが混じり合った生成物としてのランドスケープを構成していたということである。都市近郊の丘陵地という立地も植生も、したがってそこから眺望も、たんなる自然ではなく歴史的に形成されたランドスケープの一部である。

坂井信三「建築家アントニン・レーモンドの見た『自然』:山里キャンパス建設をとおしてみたランドスケープ形成の民族誌的研究」〈『アルケイア』7, p.115-116, 2013.3〉

### 3 総合受付



3. 本部棟と総合受付

この壁にあるコンクリート製の「構内案内図」は、1969年の総合受付の建設とともに設置されたと思われる。その後、当初の野球場跡地にグリーンエリアの建築が付け足されている。この構内案内図から屋外プール跡地に体育センター、大学会館(コパン)、大学会館跡地にR棟が建設されたことが確認でき、70年代から現在までに建設された建築群がアントニン・レーモンドの描いた創建時のキャンパスマスタープランを大切に維持しながら計画されてきたことがよくわかる。

構内案内図〈総合受付解説サイン〉

#### 4 本部棟(旧管理棟)



4. 東から本部棟を見る

#### 5 大学会館(食堂棟)〈現存せず・跡地にR棟〉



5. 西門から大学会館を見る

#### 6 ライネルス中央図書館(旧図書館)



6. 図書館の東側を歩く新校舎落成式典参加者  
(1964年5月30日)

オープスタック形式の図書館はICU〔国際基督教大学〕図書館と同系の設計であるが、格納書籍30万冊と2倍の規模をもっている。書架の寸法から決定された図書館の柱スパンが基準となって、それにレディーメードのアルミサッシュの寸法を使用することによって各建物のラーメンのモジュールが決められ、柱スパンとして5.4m、7.2m、8.5m、10.8mが採用されているのであるが、図書館の構造には同高の菱目型梁を持つフラットスラブが全体に使用され、リターンダクトを柱の中に収める等、書架の格納を主に設計された。

レーモンド設計事務所「南山大学」〈『建築』48, p.52, 1964.9〉

#### ●ルーバー



7. 図書館の西面と南面に取り付けられた縦ルーバー

この総合計画の基本に尾根を南北に貫通する幹線道路があり、その軸は東に12度ふれ、この道路に直角に各建物が配置され、理想的な方位を保ち、南西面はルーバーによって日照調整がなされている。

レーモンド設計事務所「南山大学」  
〈『新建築』39(9), p.129, 1964.9〉

#### ●階段室のタイル

階段室のタイルは、1964年のアントニン・レーモンドの設計による竣工時から残るもので、各階で異なるストライプ柄がデザインされ特徴的な階段空間となっている。一部のタイルに経年による剥離等がみられたため壁で覆って落下防止対策を行った。当時のタイルは今でも壁の内側に保存されている。フロア入口のタイルは剥離の恐れのあるもののみ交換し、創建当時の姿をそのまま現している。

階段室のタイル〈図書館1階解説サイン〉



8. 中央階段2階階段室のタイル(2024年8月26日)

## ●菱目型梁



9. 1階閲覧室

アントニン・レーモンド設計の図書館西側の部分は、コンクリートの梁が菱目型に組まれ、特徴的な天井デザインとなっている。これは書架がどのように置かれてもその重量が梁にうまく伝達される構造となっており、機能とデザインが一体化された合理的な設計となっている。またコンクリートには型枠として使用した杉板の木目が転写されており、見せるための構造体であることが見て取れる。そのため、2022年の改修プロジェクトでは既存天井を撤去し、コンクリートの菱目型梁を現すことで、建築家の設計手法を顕在化させることとした。

菱目型梁く図書館1階解説サイン

## 7 第一研究室棟(旧研究室棟)



10. 第1研究室棟南の入り口(1964年5月)

研究棟のプランは、6.4×57.0mの細長い建物と半径60mの曲面壁に囲まれた2つの建物をエキスパンションジョイントで結んでいる。一方は研究用個室が並び、他方はエレベーター台を中心としてKihrin[ママ]、Toilet、Janitor等の設備関係コアをつくらしている。敷地ほぼ中央に位置し、傾斜地に建っているため1部は8階建てとなり鉄骨を構造にしながら非常に軽快なエレベーションをつくらしている。

レーモンド建築設計事務所「南山大学」  
く『新建築』39(9), p.134 1964.9

## ●コンクリートレリーフ



11. 第1研究室棟内側から入り口を見る



12. 第1研究室棟南の入り口(西側コンクリートレリーフ)

この他研究棟の玄関の左右の面にはレイモンド[ママ]氏自身のデザインになるレリーフがある。これは原画をもとにして現地で製作された凹凸のあるプレキャストのコンクリート版をコンクリート壁にボルトで取付けられた唯一のものである。

レーモンド建築設計事務所「南山大学」く『近代建築』18(9), p.91, 1964.9

## 8 H棟(旧南棟)



13. 竣工時の航空写真

教室棟はG棟(扇形大・下建物)、G30棟(扇形小・上建物)、H棟、F棟により構成され、全ての建物が渡り廊下とロビーでつながっている。

山型の地型をそのまま活用して独特の平面形をもつこの建物は4棟で3,500人収容規模の教室棟に必要な動線、視線、採光、音響を慎重に考慮して設計されている。大教室の側壁は音響視界のために扇形をなし、シェル構造を利用しこの反射板は実に効果的でスピーカーも使用せずに講義が行なわれる。また中央棟中廊下は天井から自然光をとり入れ、2重サッシを透して教室の採光を助けており600人教室を含めてすべての教室が自然光のみで授業が可能である。

レーモンド建築設計事務所「南山大学」  
＜『新建築』39(9), p.132, 1964.9＞

## 9 G棟(旧中央棟)

### ●フレスコ画

教室棟の10ヶ所の壁にかかれた壁画は、レーモンドの原画から制作されたフレスコ画法によるものである。現在にも生命をもつこの古い画法が、美しい色彩を発しながら古代の世界の香りを十分に満し、時間の流れとその空間とを人々に教えている。〔中略〕

壁面は無言の内に教えを發し静かにその美を残して行くが、壁面の中に示されているシンボルは魚(キリスト)、フクロウ(英知)、ハチ(勤勉)、ハト(平和)、ユリ(清純)、三角と丸(聖霊と神の父)、父と子、太陽(神の父)を表わしている。このような立派な壁画を使用されるレーモンドには心から驚かされるが、素朴な装飾の美しさが多くの人に理解され、心の中で育てられていくことを心から願うものである。

レーモンド建築設計事務所(石沢久夫)「南山大学」

＜『建築』48, p.55, 1964.9＞



14. エントランスロビーからG棟奥を見る



15. メインストリートからG棟入口を見る

### ●ノエミのベンチ



16. G棟からH棟へとつながるロビー

教室棟に配された家具で特筆すべきものは、ロビーに置かれた木製のベンチである。デザインは、「背板有り」、「背板無し」の2種類がある。背板有りのものは、フラットな座板と背板、丸材の脚の組み合わせで、本部棟や図書館に配されたテーブル類のデザインを思わせる。4本のベンチが現在も残っている。背板無しのもは、ナラ材の厚い板を組み合わせただけの簡素で力強いデザインである。現在も20本以上が残っており、G棟、G30棟のロビー、G棟とG30棟を結ぶ渡り廊下に置かれており、学生や教職員たち、

南山大学で過ごす者であれば誰もが1度は座ったことのあるベンチであろう。触れる人々の手垢や脂で磨かれ、飴色に陽焼けし、その木目は深く、美しい表情を持つ。50年の酷使に耐えた姿は、家具というよりは、むしろ、彫刻作品のような風格が漂う。

伊藤真司「南山大学の家具デザイン」

＜『南山学園のレーモンド建築(下)(南山学園史料集, 9)』p.88(2014)＞

### ●中央廊下 十字の影



G棟の中央廊下の地下1階には、トップライトから注ぐ光によって十字型の影が落ちてきます。地下1階のダウンライトを消すとその姿がよくわかります。トップライトは両側を教室に挟まれた廊下の自然採光と廊下に面したガラス間仕切りを通して教室への採光を計った計画と考えられます。自然の光を建築に多く取り入れたいというレーモンド氏の計画が、この十字架の影を創り出しました。

十字の影く 図書館レーモンドコーナー解説サイン >

17. G棟地下のピロティ(2013年2月25日)

### 10 G30棟(旧600人棟)



18. G30棟を東側から見る



19. G30棟教室内観

丘陵を利用して掘削を最小限に抑えた階段教室の勾配は、自然の傾斜がそのまま生かされている。ロビーのメインストリート側は全面ガラスが採用され、屋外とのつながりを感じることができる。また、室内も窓を広くし、自然光だけで講義をすることが可能である。講義だけでなく、数々の行事で大講堂としての役目を果たしてきた。

< 図書館1階レーモンドコーナー解説サイン >

### ●フレスコ画

ロビーには、横8メートル、縦2メートル80センチのフレスコ画により制作された壁画が飾られている。中央には黒い太線で十字架が描かれている。十字架から発せられたかに見える白い光は浮き上がって見える。いまでも鮮やかな色彩を保っている。

< 『南山学園のレーモンド建築(下)  
(南山学園史料集, 9)』 p.47(2014) >



20. G30棟フレスコ壁画

### 11 F棟(旧北棟)

30人教室13室、60人教室4室など、この棟は小教室よりなるゼミナール形式を主にしている。

レーモンド建築設計事務所「南山大学」< 『建築』48, p. 63, 1964.9 >



## 12 体育館

ここでは明らかに範を「八幡(製鉄体育館)」にとり、規模をやや小型にしているが観客席部分をコンクリートで固め、中央のヴォールト部分を鉄骨による「ダイヤモンドトラス」にしたところが異なる。「八幡」が観客席の上までコンクリートシェルで覆って量感を出しているのに比べ、「南山」ではトラスをうけとめる梁をつかったためヴォールトのスパンが40mに縮み、しかも低さを示すようなデザインになった。大学の体育館ということもあり、特に「南山」全体が環境に対して意識的に受身の姿勢をもつことから、大振りには見せない努力をしていることが示されている。

構造的努力に加えて、環境への配慮をはかった建物が「脱近代」への手がかりをつくっていく。

〈『アントニン・レーモンドの建築』p.158(1998)〉



21. グラウンド側より見る体育館全景



22. 鉄骨がダイヤモンドトラスによる大空間

## 13 鉄製レリーフ(M棟外壁面)



23. M棟鉄製レリーフ

南山大学名古屋キャンパスには、初代学長のパッヘ師にちなんだ「パッヘ・スクエア」があり、パッヘ記念碑後ろにある建物の壁画は、レリーフで飾られている。

作者は、名古屋キャンパスの設計者で建築家のアントニン・レーモンド氏。真理の源であり神の象徴としての光—太陽に十字架を、天と地と海を分け、そこに鳥や魚をあしらうなど「旧約聖書」の「天地創造」をモチーフに、カトリック大学にふさわしい本学のシンボルとして表現されている。

パッヘ・スクエアの壁画(南山大学建築探訪)〈『NANZAN Bulletin』153, 2005.6〉

## 14 神言神学院

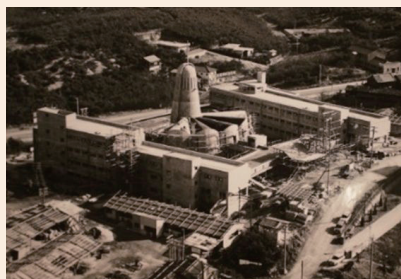
神学院の中心でもあり、魂でもある礼拝堂は、平面的に四方を囲まれて、敷地の最高所に置かれ、大きく廻廊を廻らす囲まれた内庭をつくる。

西棟の受付部分、東棟の食堂と娯楽室部分が低層であるため、礼拝堂はその建物を超えて聳える。北棟には修道士と神学生、神父たちの部屋があり、病室も同様に、すべてが南側におかれた礼拝堂と内庭に面している。東棟〔南棟の誤りか〕は年少の神学生が入り、図書館と教室を備え、南の庭や運動場が見渡せる。日本ではどこにあっても、太陽に面することが重要であり、大学のようにこの神学院でも主要な部屋の大部分が南面しているのである。

〈『自伝アントニン・レーモンド』 p.246(1970)〉



24. 神言神学院聖堂外観



25. 建設中の神言神学院全景を北西側上空から見る



26. 神言神学院聖堂内観

## ■ 本学関係者による関連論文・記事

- 南山大学カトリック文庫グループ「建築家アントニン・レーモンドの天地創造」(カトリコス：南山大学カトリック文庫通信)39, p.2-16  
<https://office.nanzan-u.ac.jp/library/publi/item/katholikos39.pdf>(参照2024-11-1)
- 「南山大学ライネルス中央図書館」(東海地区大学図書館協議会誌)68, p.44-45(online),  
<https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/tokai/>, (参照2024-8-23)
- 山口洋平「南山大学『レーモンド・リノベーション・プロジェクト』によるキャンパス改修事業」(Re: Building maintenance & management)211, p.86-89, 2021.7
- 永井英治「《史資料解説》表紙写真のソファとスツール」(南山アーカイブズニュース)9, p.14, 2016.11  
<https://www.nanzan.ac.jp/archives/publication/archivesnews/000073.html>(参照2024-8-23)
- 永井英治「《史資料解説》“PILOT PLAN OF NEWBLDGS. TO NANZAN UNIVERSITY”(レーモンド設計事務所所蔵)について」(南山アーカイブズニュース)6, p.12, 2013.11  
<https://www.nanzan.ac.jp/item/202102/AN6.pdf>(参照2024-8-23)
- 坂井信三「建築家アントニン・レーモンドの見た『自然』:山里キャンパス建設をとおしてみたランドスケープ形成の民族誌的研究」(アルケイア:記録・情報・歴史)7, p.73-130, 2013.3  
[https://www.nanzan.ac.jp/item/202102/Archeia7-3\\_Sakai.pdf](https://www.nanzan.ac.jp/item/202102/Archeia7-3_Sakai.pdf)(参照2024-8-23)
- 伊藤真司「モダニズム建築の保存と活用への一提言」(アルケイア:記録・情報・歴史)5, p.77-112, 2011.3  
[https://www.nanzan.ac.jp/item/202102/Archeia5-4\\_Ito.pdf](https://www.nanzan.ac.jp/item/202102/Archeia5-4_Ito.pdf)(参照2024-8-23)
- 高橋洋子「『南山大学』と建築家アントニン・レーモンド:マスタープラン模型の復元にあたって」(アルケイア:記録・情報・歴史)1, p.79-98, 2007.3  
[https://www.nanzan-u.ac.jp/Menu/koho/kosya/pdf/archeia01\\_takahashi.pdf](https://www.nanzan-u.ac.jp/Menu/koho/kosya/pdf/archeia01_takahashi.pdf)(参照2024-8-23)
- 加藤富美「アントニン・レーモンドと神言修道会の会員たち:南山大学山里校舎建築をめぐる」(南山大学図書館紀要)8, p.41-59, 2003.5  
[https://www.nanzan-u.ac.jp/Menu/koho/kosya/pdf/kiyou8\\_raymond.pdf](https://www.nanzan-u.ac.jp/Menu/koho/kosya/pdf/kiyou8_raymond.pdf)(参照2024-8-23)

## ■ その他の関連論文・記事

- 「<Special Feature 学校特集 キャンパスを編み直す>大学編:南山大学レーモンド・リノベーション・プロジェクト(名古屋市)」(日経アーキテクチュア)1202, p.46-51, 2021.10
- 武田新平「くしあわせな建築 第30回BELCA賞ベストリフォーム部門受賞建築物紹介>南山大学 レーモンド・リノベーション・プロジェクト」(BELCA news)33(177), p.94-99, 2021.10
- 古賀大他「南山大学の近代建築保存再生デザイン」(日本建築学会技術報告集)27(66), p.865-870, 2021.6  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/ajit/27/66/27\\_865/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/ajit/27/66/27_865/_pdf/-char/ja)(参照2024-8-23)
- 廣瀬浩二他「南山大学 レーモンド・リノベーション・プロジェクト」(新建築)96(5), p.154-161, 2021.4
- 武田新平「『レーモンド・リノベーション・プロジェクト』の理念と実践(アルケイア:記録・情報・歴史)14, p.1-34, 2019.11  
[https://www.nanzan.ac.jp/item/202102/Archeia14-1\\_Takeda.pdf](https://www.nanzan.ac.jp/item/202102/Archeia14-1_Takeda.pdf)(参照2024-8-23)
- 木方十根「建築家の生涯とキャンパス建築という大仕事:アントニン・レーモンドにとっての南山大学山里キャンパス」(アルケイア:記録・情報・歴史)12, p.35-69, 2017.11  
[https://www.nanzan.ac.jp/item/202102/Archeia12-3\\_Kikata.pdf](https://www.nanzan.ac.jp/item/202102/Archeia12-3_Kikata.pdf)(参照2024-8-23)
- 高橋敏郎「レーモンドの学会館を撮影して」(アルケイア:記録・情報・歴史)4, p.1-15, 2010.3  
[https://www.nanzan.ac.jp/item/202102/Archeia4-4\\_Takahashi.pdf](https://www.nanzan.ac.jp/item/202102/Archeia4-4_Takahashi.pdf)(参照2024-8-23)
- レーモンド建築設計事務所「南山大学体育館」(新建築)43(11), p.193-198, 1968.11
- レーモンド建築設計事務所「神言神学院」(新建築)41(10), p.139-148, 1966.10
- レーモンド建築設計事務所「南山大学」(建築)48, p. 38-70, 1964.9
- レーモンド建築設計事務所「南山大学」(建築文化)19(215), p.119-127, 1964.9
- レーモンド建築設計事務所「南山大学」(近代建築)18(9), p.79-101, 1964.9
- レーモンド建築設計事務所「南山大学」(新建築)39(9), p.116-138, 1964.9

## ■レーモンド関連所蔵資料

標題および責任表示	出版者	出版年	請求記号
非凡の人三田平凡寺：趣味家集団「我楽他宗」の磁力 / チャプコヴァー・ヘレナ編著；荒俣宏 [ほか] 著 (第7章 国際ネットワークとしての我楽他宗, p. 191-214)	かもがわ出版	2024	289K  1549
鈍色の戦後：芸術運動と展示空間の歴史 / 辻泰岳著 (第1章：占領下のアントニン・アンド・ノエミ・レーモンド, p. 39-74)	水声社	2021	702K  2062
南山大学レーモンド・リノベーション・プロジェクト保存活用工事報告書	[出版者不明]	2020	526K  278
ある土地の物語：中島知久平・ヴォーリズ・レーモンドが見た幻 / 榊島榮一郎著	北樹出版	2019	523K  518
モダンデザインが結ぶ暮らしの夢 / 住田常生 [ほか] 編著 (第2章：アントニン&ノエミ・レーモンド, p. 38-57)	丸善出版 (発売)	2019	758K  209
Antonin Raymond architectural details : 1938 (復刻版) / [Antonin Raymond]	鹿島出版会	2014	520  378 (大型)
南山学園のレーモンド建築 (下) (南山学園史料集 ; 9) / 南山大学史料室編	南山学園	2014	377.2K  974  v. 9 (大型)
チャーチ&チャペル：アントニン・レーモンド：日本：1935-1970 / 内藤恒方, 土屋重文解説；宮本和義撮影	バナナブックス	2013	526  263
南山学園のレーモンド建築 (上) (南山学園史料集 ; 8) / 南山大学史料室編	南山学園	2013	377.2K  974  v. 8 (大型)
おしゃれな住まい方：レーモンド夫妻のシンプルライフ / 三沢浩著	王国社	2012	523K  451
喪われたレーモンド建築：東京女子大学東寮・体育館 / 東京女子大学レーモンド建築東寮・体育館を活かす会編著	工作舎	2012	523  440
レーモンドの失われた建築 / 三沢浩著	王国社	2010	523K  420
アントニン&ノエミ・レーモンド：建築と暮らしの手作りモダン (第2版) / 神奈川県立近代美術館編；三本松倫代訳	丸善 (発売)	2007	520K  323
自伝アントニン・レーモンド (新装版) / アントニン・レーモンド著；三沢浩訳	鹿島出版会	2007	520L  6  B (学外書庫)
アントニン・レーモンドの建築 (SD選書;246) / 三沢浩著	鹿島出版会	2007	520  234  v. 246
A・レーモンドの建築詳細 / 三沢浩著	彰国社	2005	523K  349
素顔の大建築家たち：弟子の見た巨匠の世界 / 日本建築家協会企画・監修；都市建築編集研究所編集・制作 (アントニン・レーモンド, p. 92-129)	建築資料研究社	2001	520K  411  v. 1
内田魯庵山脈：「失われた日本人」発掘 / 山口昌男著 (21 大正の現実と国際的知を繋ぐ力：アントニン・レーモンド, p. 341-350)	晶文社	2001	901K  2356
A・レーモンドの住宅物語 (建築 Library;7) / 三沢浩著	建築資料研究社	1999	527K  209
アントニン・レーモンドの建築 / 三沢浩著	鹿島出版会	1998	523K  298
朝日の中の黒い鳥 (講談社学術文庫;[850]) / ポール・クローデル [著]；内藤高訳 (アントニン・レイモンドの東京の家, p. 204-208)	講談社	1988	081K  2418  v. 0-205
Antonin Raymond : an autobiography / [A. Raymond]	C. E. Tuttle	1973	520  270 (大型)
建築：雌の視角 / 長谷川堯著 (田園と都市の目撃：日本をめぐるタウトとレーモンドの創造の軌跡, p. 282-345)	相模書房	1973	520  417
現代日本建築家全集 1:アントニン・レーモンド / 栗田勇編著	三一書房	1971	520  271  v. 1 (大型)
自伝アントニン・レーモンド / アントニン・レーモンド著；三沢浩訳	鹿島研究所出版会	1970	520  6  A (大型)
私と日本建築 (SD選書;17) / A. レーモンド著	鹿島出版会	1967	520  234  v. 17

## 外壁の赤い色の由来

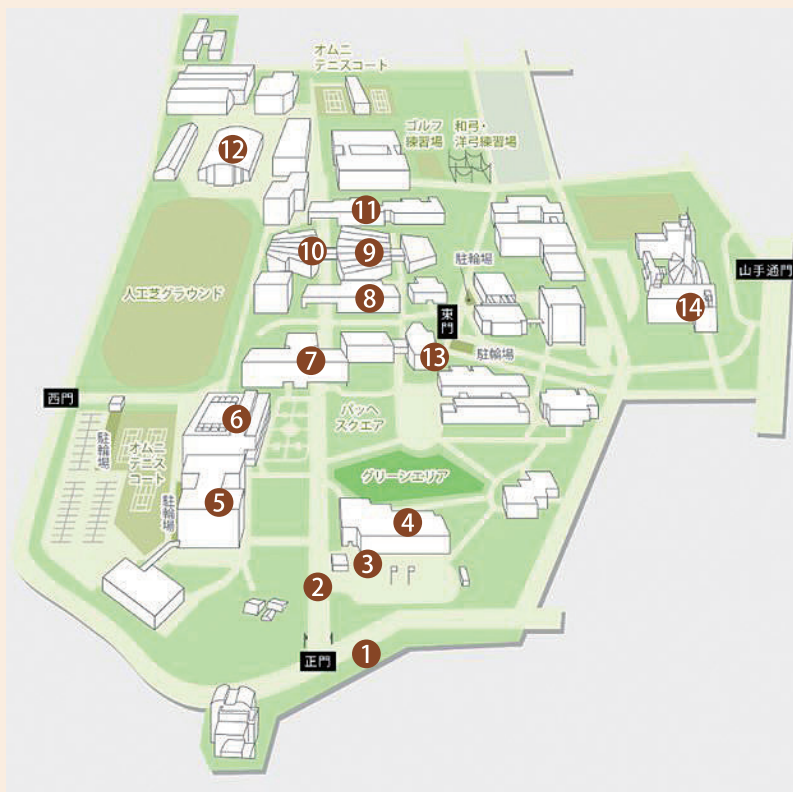
研究室棟の躯体工事が完了して外観を見ることができるようになってから、コンクリート打放し一部着色仕上げとなっていることから、レーモンド夫妻が見に来た折にその部分をどうするか決めてもらうことになりました。二人は建物を近くからと遠方から眺めて、ミセス・レーモンドが幹線道路のり面にある赤土をとりあげてかざしながらこの土と同色とすることでミスターの了解を得ました。水性塗料でコンクリート肌色を維持して着色することになりました。どう



27.竣工間もないころの数少ないカラー写真

するか理解できず、ミセスが推薦する東京の塗装屋さんの社長に来てもらい、現地で着色してレーモンドに見ていただき決定されました。柱、梁以外の外壁部分(主に腰壁)に着色されたレンガ色はこうして決まり、打放し外壁に暖色が加わり、親しみの持てる明るい外観ができあがり、全部の建物8棟が同じように着色されました。

北澤興一「南山大学の設計に於ける『建築家アントニン・レーモンド』」  
 <『南山学園のレーモンド建築(下)(南山学園史料集, 9)』p.79>



### ◎第1・2期工事 (1962-1964)

- ④本部棟 (管理棟)\* ( ) 内は当初の名称
- ⑤学生会館 (食堂棟) <現存せず・跡地にR棟>
- ⑥ライネルス中央図書館 (図書館)
- ⑦第一研究室棟 (研究室棟)
- ⑧H棟 (南棟)
- ⑨G棟 (中央棟)
- ⑩G30棟 (600人棟)
- ⑪F棟 (北棟)

### ◎第3期工事 (1964-1965)

- ⑭神言神学院

### ◎第4期工事 (1967-1968)

- ⑫体育館

### ◎その他

- ①正門
- ②メインストリート
- ③総合受付 (1969)
- ⑬鉄製レリーフ (M棟外壁面) (1972)

南山大学ライネルス中央図書館 カトリック文庫通信

カトリコス No.39 別冊 2024.12.2 発行

編集・発行：南山大学ライネルス中央図書館 カトリック文庫グループ  
 〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

Phone : 052 (832) 3163

\* 図書館 Web ページでもご覧いただけます。

<https://office.nanzan-u.ac.jp/library/catholicbunko/katholikos.html>

\* 掲載写真(8を除く)提供：南山アーカイブズ